聖歌集改訂ニュース

今、これから、鮮度ある、2006年聖歌集を！

『古今聖歌集』が1959年に発行されて以来、47年ぶりの全面改訂版聖歌集が、いよいよ発行に向けて作業大詰めとなっています。日本聖公会の聖歌集は、「礼拝用書」として承認される必要があるので、明年５月に開催予定の次期総会において、議案として審議され、決議を経た上での出版となります。『古今聖歌集』の最初の見開きページを見ると、現行『古今聖歌集』は、1956年の第25総会で採択されていますので、そこから数えれば50年ぶりの改訂となります。

５０年ぶりの改訂ということは―

５０年＝半世紀という時の経過にあって、2006年に聖歌集を改訂するという出来事を前に、改訂委員会は、つねに心を「今、これから」に向かわせながら、現段階に至ってもなお、模索を続けています。というのも、世界は流転を続け、思想や生活も変わり、神学や教会の課題も社会の問題も変化と刷新を続けている中で、2006年という時において、聖歌集として、神への賛美・感謝・祈り・礼拝の歌をまとめあげることは、非常に困難な作業であるからです。2006年で、時を区切らなければならないのです。聖歌集は、今、これからの礼拝生活のために必要な歌を収め、それらを、少なくとも約20年くらい先までは用いてゆく歌集です。しかし、20年先の世界、教会、礼拝が、どのような状況になっているかを見定めることは容易ではありません。この委員会が始まった1994年から10年余でさえ、世界や社会生活には、大きすぎるほどの変化が起こっています。それに伴って、聖歌集改訂の姿勢も、軌道修正を重ねてきた部分があります。

「新収録聖歌」は約１５０曲、されど―

今年10月に札幌で開催された「第11回教区礼拝音楽担当者会」では、本格改訂版聖歌集に収録される聖歌一覧表を発表しました。聖歌（Hymns）の収録予定曲数が約570曲、礼拝式文用曲譜（Service Music）が約200曲、という構成です。ここでは、聖歌（Hymns）についてのみ言及しますが、現行『古今聖歌集』から引き継がれる聖歌が約300曲（大幅に改訂したものも含めて）、『古今聖歌集増補版』（1995年）、及び『改訂古今聖歌集試用版』（2001年）から新たに収められた聖歌が約120曲、残る約150曲が新収録聖歌という勘定です。

けれども、「新収録聖歌」といっても、それは必ずしも新しい時代に創作された聖歌ばかりではなく、古来より伝わる歌で未収録であったもの、他教派の教会で歌い継がれてきたもの、諸外国の聖歌集における最近（1980年代あたりまで）の創作聖歌の翻訳もの、がほとんどです。はっきり申し上げれば、ここ10年以内に作られた聖歌が僅かなのです。もちろん、聖歌が社会の趨勢に安易に振り回され

てしまうことは避けなければなりませんが、今、これからに生きてゆく教会が、今この時に必要な祈り、今の時代にこそ感謝・賛美すべきことに対して、敏感でなくてよいでしょうか。今でこそ、歌うべきこと、祈るべきことが、まだまだあるのではないでしょうか。2006年で一区切りつけるまでの時間は、あと本当に僅かな時間ではありますが、今年の降臨節、クリスマスの黙想の実りからも、新たな聖歌が生まれてくることを、委員会として真剣に願っています。

わたしたちの今の祈りを歌に―

極論にもなりますが、時代を超えて歌い継がれてきた、普遍的な賛美の歌は、すでに十分に収められることになっていますので、それらを今あわてて搾り出す必要はありません。早急に求められているのは、今の世界の課題、今の日本の社会、日本の教会における課題、日常生活における心の有り様、これらに直面した中からの賛美の歌です。

たとえば、『試用版』2117番「傷ついた人の祈りに」の2節には、罪の思いや先行きの不安に苦しむ中でも、「愛は変わらずに弱さに向き合い」とあります。そしてさらに、「救い主の手はふれあいのうちに」と3節で歌います。このような詩が、今のわたしたちの心の有り様に触れているのではないでしょうか。また、2092番「あなたは岸辺で」が愛唱されるのも、「力のないわたしに　したがえと招かれる」主が、「わたしを見つめ　わたしの名を呼ばれ」、私とともに歩んでくださっていることに気づかされるからでしょう。さらに、3007番「暗闇行くときには」（昨年11月に配布された『改訂聖歌・新作聖歌Ⅱ』）は、暗闇のような状況にあっても、まことの光なる主を仰ぎ見て、「争いに平和を　死の中には命を　さあ光を灯そう」という詩が、決して浮き足立たずに高揚してゆく旋律に乗って、歌う者の心を奮い立たせてゆきます。改訂作業の始まった頃とは、少し方向が変化したとも言えるでしょうが、これが10年間の変化だとも考えられます。「私の救い」という個人的信心の強調時代から脱却して、共同体としての感謝・賛美「私たちの喜び」という視点を強調したのが改訂作業開始当初の姿勢でした。その段階を経た上で、共同体意識の中における「個」の確立、自立、自己決断、ということが、今、これからの日本の精神風土における教会の課題の一つのように思えます。

福音の宝を携えて、聖書の教えを広めて、人々を救いに導こう、という力の入った伝道意欲を鼓舞する歌は足りています。世界と社会と生活の諸課題に向かったキリスト者の姿勢を、今の私たちの、等身大の祈りの言葉として、鮮度ある賛美が収められること、それが2006年の改訂聖歌集への急務です。と同時に、改訂聖歌集が確定された後も、今、これからの賛美の歌を編み出してゆく動きは止めるべきではありません。それが、次の次の聖歌集への足がかりとなるばかりでなく、教会が今、これからに生き続けてゆく生命線であるからです。　（司祭 パウロ 宮崎 光）

第１１回教区拝音楽担当者会開催 北海道教区の歓迎の中で 最後の一年に向けて

2005年10月7日～8日

1995年、『古今聖歌集増補版』が出版された年にセミナーの形で各教区の礼拝音楽担当者が集まって以来、毎年全国の教区を周って秋に開かれてきた教区礼拝音楽担当者会は、今年で11回を数え、全教区から担当者22名、聖歌集改訂委員６名、聖公会出版１名、管区スタッフ1名の計30名が札幌キリスト教会に集った。初秋のさわやかな札幌で、植松北海道教区主教を先頭に札幌キリスト教会牧師の大友司祭はじめ信徒の皆様の温かなお心遣いのもと、終始和やかな雰囲気の中で行われた。

１日半の中で、セッション①委員会からの報告、②各教区からの報告、③質疑、自由な話し合い、④課題の分かち合い、⑤聖餐式準備と盛りだくさん。その中で、担当者の方々からのご質問は教区の信徒の皆さんのご質問でもあると受け止めているので、セッション③の質疑、話し合いのいくつかをご報告したいと思う。

Ｑ新聖歌集の名前は？

担当者の皆さんに「古今という名を残してもらわないと困る方は？」と投げかけたところ手を挙げた方はなんとゼロ。ということで、今のところあっさりと委員会が考えていた『日本聖公会聖歌集』が賛成多数。これは単純に『日本聖公会祈祷書』に準拠したものである。但し、“日本”をつける必要があるのか、という意見もあった。

Ｑ本格版が出版された後にも現行の古今聖歌集（以下『古今』）を併用できるようにしてほしい。

Ａ本委員会の任務は現行『古今』を全面改訂することなので、併用はない。2006年の出版後、各教会で買い揃えるまでには時間がかかることなので、ある程度の期間の『古今』の使用は承知しているが、それは併用という意味ではない。

Ｑ出版後、『古今』や他の聖歌集の聖歌を歌うことはできないのか

Ａ‘94年から「新しい聖歌を」キャンペーンで『古今』以外の聖歌使用を容認してきたように、新聖歌集以外の聖歌の使用は可能であるという総会決議が必要となってくるであろうが（公祷の場合）、小さな集まりなどでは問題ない。ことに、葬送式などで故人の愛唱歌として歌うことには全く問題ない。

Ｑ出版後も新しい聖歌に対する訂正や質問などに対応する機関が必要ではないか

Ａ原則としてはこの委員会は出版までがタスクだが、出版後の受け皿を検討している。

Ｑオーガニスト用の大判の聖歌集の出版の予定は？

Ａ新聖歌集のサイズはＡ５判で試用版と同じ（『古今』のおよそ倍の大きさ）なので、現時点では出版予定はない。

この後、「歌詞は総ルビにしてほしい」という意見と、「楽譜の中に全節を入れるのに賛成、反対」とが絡み合って、活発な意見が交わされた。

・小さい子供でも、外国人でも読めるように総ルビにしてほしい
・楽譜の中はひらがなで入れているが…
・歌うときには、意味を知るために歌詞の方を見る。楽譜の中のかなでは意味がとれない
・節によって伸ばし方が違うことがあるので、全節楽譜の下に入れる必要がある
・楽譜の中に全節が入ると、節が多い場合に

はどの節を歌っているのかわからなくなる。何か印をつけるなどの工夫はできないか

・オーガニストにとっては、全節入っていると左右の手の楽譜が離れて弾きにくい

・いや、言葉が入っていると、弾きながら歌うことができてよい

・古今の場合は縦書きだったので、楽譜には１節のみでも、歌詞の方を見てすぐに意味がとれたが、横書きは見ても意味がすぐに入ってこない。

等々、どの意見も説得力のある意見であったが、「誰に向けての聖歌集なのか」というご意見などを基に、委員会では個別に丁寧に対応したいと考えている。

その他の希望では

・楽譜だけでなく、出版と同時に音（ＣＤなど）での紹介がほしい

・点字聖歌集もできるだけ早く作っていただきたい、などの意見が出された。

セッション④では、「詩篇第24編、93編、146編の曲譜を選び、言葉をつける（ポインティング）」という宿題の分かち合いをした。初めての経験だったという方たちの工夫、自作の曲譜を作った方たち、誰にでも歌える易しい曲譜の選曲、洗練されたポインティング等、その取り組みから、詩篇を歌うことが身につきつつあることが感じられた。この経験から、さらに現代の日本語の言葉のリズム、イントネーションなどがより自然に歌える曲譜、ポインティングになっていくことが望まれる。既成のものではなく、独自のものが生まれてくることも期待される。

今年もまた、開会の祈り、夕の礼拝、朝の礼拝、そしてまとめの意味でもある聖餐式と、心を合わせて祈り、互いに声を響き合わせて新しい賛美の歌を捧げることがこの担当者会の中心であり、私たちを支えているものであった。その場を提供し、応援して支えてくださった札幌キリスト教会の皆様への感謝は言葉に尽くせないものである。

「日本聖公会の宣教、福音理解、あるいは礼拝と言ったときに、北の果ての稚内や網走は含まれているのだろうか、と考える。日本聖公会と一言で言っても多様な文化、伝統、暮らしのあることを考えていただきたい」という開会での植松主教のお言葉は、最後の年に向けて、本委員会がもう一度、新しい聖歌集の意味を深く考える機会となったと思う。

（加藤啓子記）

「礼拝について学ぼう inサッポロ」

北見聖ヤコブ教会信徒　上平 佑子

―会衆として、奏楽者として私たちの希望、悩み―ということをテーマとして、教区礼拝音楽担当者会終了後、宮崎司祭と加藤啓子姉にご協力いただき、日頃北の果てに住み、礼拝音楽について情報を得る機会の少ない者たち十数名が集会をもちました。試用版の中の礼拝用聖歌として歌いにくいものについて、伴奏楽器と伴奏譜、新聖歌集の方向性、口語の詞が増え、み言葉を歌うことの実感が湧く、聖歌を指導するときに心がけること等々、たくさんの質問、話し合いがなされました。エピソードを伺いながら新曲を学ぶこともできました。

後日、とても楽しかった、勇気が与えられた、作詞してみようかと思った、信仰生活は闘いと実感しているので、平和指向の曲ばかりでなく古今412を是非残して欲しい、他の感想が寄せられています。

第11回礼拝音楽担当者会に参加して

下地　薫（沖縄教区）

クラーク博士の胸像がある北大キャンパス、そこを庭として眺められるところに札幌キリスト教会がある。16時30分那覇発－羽田－千歳－札幌22時着。夜の札幌の寒かったこと！（那覇28度、札幌7度）。担当者会も11回を数える。聖歌集改訂委員の長年の努力には本当に頭が下がる。

第2回の担当者会への参加をきっかけに聖歌集改訂に関わり、改訂委員会の「より多くの人の意見を取り入れた聖歌集を作りたい」という熱い思いに共感し、微力ながら協力してきた。

いよいよ来年の秋、改訂聖歌集発刊の予定となり、今回の担当者会でその詳細目次が発表された。しかし改訂委員会としては「まだまだ曲が足りません。特に『キリスト者の責任』の項目の歌をもっと充実させたい」とのこと。それは聖歌集改訂が単に『文語を口語に』（古いものを新しくする）ということだけではなく、また外国の聖歌・新作の聖歌を採り入れる事にとどまらず、「聖歌が現代の宣教の課題を実現していく力を持った道具になり得るという、新しい意味のある存在にまで高められていく」意義のあるものだと私には思われた。

本当に「キリスト教は歌う宗教」だと思う。クリスチャンで良かったと改めて思った。今回も素晴らしい歌がたくさん紹介された。歌いながら涙がこぼれてきた。

聖歌集改訂はラストスパート。今歌うのにふさわしい聖歌、これからも歌い継がれていく聖歌が求められています。そして完成後も、バージョンアップし続けることが大事だと考える。

高橋　牧（東京教区）

「第11回　教区礼拝音楽担当者会」は、北海道という大らかな土地柄に包まれ、また札幌キリスト教会の方々の温かいお支えも頂いて、大変豊かなひとときとなりました。

各教区からの報告では、地域性・物理的な状況の違い等による温度差は多少あるものの研修会などの具体的な動きも活発化し、改訂聖歌の導入に向けてじわじわと機は熟してきているという印象を受けました。また、期間中の朝･夕・就寝前の礼拝や聖餐式では、生まれたての聖歌とたくさん出会い、その新鮮な息吹を全教区の方々と分かち合いながら声を合わせるひとときに、心震える感動がありました。まさに私達の祈りの言葉としての聖歌に命が吹き込まれた瞬間であり、単に楽譜を眺めているだけではなかなか感じられない、礼拝によって息づく聖歌の力、同時に聖歌によって豊かにされる礼拝、というものを体感することができたように思います。

バラエティ豊かな新作聖歌や式文用曲譜にはフレッシュな息吹が、これまで大切に歌い継がれてきた聖歌には、そこに溢れる賛美の思いに改めて気づかされる喜びがあります。それらは、この歴史的なフェーズに立ち会っているからこそ与えられている恵みのように感じます。

50年余りの歳月の中で私達の身体と心に浸透してきた古今聖歌集と同様、改訂版の聖歌集もまた、じっくりと時間をかけて味わいながら私達の内に浸み込ませていけるものであることを信じ、北海道の地での大きな実りがさらにより多くの方々と分かち合えるよう、発行までの残された時間で私自身にもできることを考えたいと思います。

主教会における聖歌集改訂に関する説明と懇談会報告

10月19日（水）、東京教区聖アンデレホールにて開催されていた主教会において改訂聖歌に関する時間を用意していただき、在京の聖歌集改訂委員４名が出席しました。

祈祷書の聖職按手式文（主教按手・司祭按手）には、古今聖歌276番および125番の歌詞が掲載されているが、今回の改訂により歌詞が変わるのは祈祷書改正にあたるかについて、祈祷書に掲載されているのは聖歌の引用であり、歌詞の改訂は祈祷書の改正には当たらないことなどが話し合われました。

改訂聖歌の歌詞の人名・地名などは、原則として新共同訳聖書に準じることを確認しました。口語訳聖書に準拠している現行祈祷書も、今後新共同訳聖書に向って行くであろうとのことです。

さらに、今回の「改訂版聖歌集」承認決議によって、新しい聖歌集が日本聖公会現行聖歌集になること、出版後の意見集約・校正の担当部署を定める必要があること、今後は恒常的に、新しい聖歌を蓄積してゆくような活動の必要性を確認しました。

今回主教会と、来年の総会決議に向けてよい意見交換の場を与えられたことを一同感謝しました。　（司祭　鈴木伸明記）

新「聖歌集」の価格は？

・大きさはＡ５判（現在の試用版と同じ）です。
・紙質は、現行古今聖歌集と同じ「ニューバイブリー」という紙を使用します。
・ページ数は約１２００ページの予定。
・価格は現時点で一冊３０００円程度の見込み。
・出版は、２００６年１１月の予定です。

《改訂聖歌・新作聖歌Ⅲ》を配布

聖歌集改訂ニュースより一足先に、楽譜集《改訂聖歌・新作聖歌Ⅲ》を、各教会にお届けしました。古今聖歌集の改訂版が19曲、新作聖歌（3000番台の聖歌）が19曲の、計38曲が収められ、それぞれの解説文を巻末に掲載した楽譜集です。

古今聖歌集の改訂版は、降臨節（1, 5, 6, 10, 12, 14番）、降誕節（26, 30番）、顕現節（45番）、主イエス命名の日（142番）、被献日（145番）など、今の時期から2月頃までの、ご降誕の祝いの期節に早速使えるものを収めました。

また、古今415番の改訂訳と3024番は、同じ曲（SLANE）に、異なる二つの詩が乗せられています。3024番はBe Thou My Visionという海外ではたいへん愛唱されている歌で、口語的な訳詩が施されています。

この楽譜集における新作聖歌の目玉は、2003年と2004年の教区礼拝音楽担当者会において、訳詩の宿題として分かち合った三曲（3025, 3026, 3029番）です。これらは各教区礼拝音楽担当者の共同訳詩作業が実を結んだものです。

楽譜集Ⅲは、各教会に二部ずつお送りしています。新しい聖歌は歌われることによって推敲されていきますので、必要部数を用意して、礼拝で実際に歌ってみていただきたいと思います。楽譜集Ⅲと、昨年発行した楽譜集Ⅱは、多少残部がありますので、もし紛失・見失ってしまい、必要だという教会は、当委員会までお申し出ください。

発行：聖歌集改訂委員会
ご意見・ご質問は日本聖公会管区事務所まで
〒162-0805 東京都新宿区矢来町65
TEL 03-5228-3171 FAX 03-5228-3175
hymnal.po@nskk.org　http://nskk.org/hymn/